

結婚生活の幸福度

— 金沢市中心の調査 —

沢 田 忠 治

目 次

(一)	緒 言	78
(二)	調査問題と方法	79
(三)	調査の結果と考察	80
(1)	結果の概要	80
(2)	結婚経過年数による幸福点の変化	82
(四)	結 語	86
(6)	職種別幸福度の平均	86
(5)	夫婦の幸福点の相関	85
(4)	夫婦間で相手に対する不平は何か	84
(3)	夫婦間の意見の一致、不一致の問題	83

(一) 緒言

この報告は、今度、金沢大学社会教育研究室内の社会心理学研究グループのメンバーが協力して、金沢市を中心にしてその近郊に住む八〇三名の方々に対して、結婚生活の幸福度の程度を調査したものである。

夫婦関係は、人間関係のうちで最も親密で全面的な関係であつて、互に自己の中心層にふれ合う結合である。

したがつて、他人の介入を一切ゆるさない閉鎖的な関係の側面をもっている。その側面の最たるものは、生物学的欲求にもとづく性的結合である。

従来、この性の問題をふくめた結婚や夫婦の問題の実証的な研究は、社会的なタブー(禁忌)として、考えられていたため、この方面の研究は一般的に遅れていたと考えられる。

実際、結婚の幸福、不幸の区別は容易なことではないと思う。多分、この区別は正確にはきめられないことかもしれない。

もし、読者の皆さんが「あなたの結婚生活は幸福ですか」ときかれたとしたら、何とお答えになられるでしょうか。

新婚当初ならば、「それは幸福さ」といいきれる人もあるかもしれないが、長年つれそつた夫婦においては、幸福ですと答えるのも気がひけるであらうし、女房が嫌いかと聞かれると否定することが簡単にできるが、積極的に好きだといいきることは、日本の習慣では躊躇するものであらう。また、今さら好きだとか嫌いだとかいわれた関係ではないし、それかといつて、もし女房がいなければ非常に困り、落ついた家庭生活はできないであらう。

夫婦間でたまたまその日に気まづいことがあれば、自分たちの結婚生活は不幸であると答えることがあるかもしれないが、それも時間がたてば、幸福だと思ふこともある。

そうだとすれば、はつきりと幸、不幸はきめられないものと思つ、よく喧嘩をする夫婦が、心から相手を憎み合っているとはかきらない。感情的な怒りを一時的に爆発させて、あとでは一そう親密な結びつきを得られることも多いと考えられる。

その反対に外目ではほとんど風波が起らず幸福そうに見える家庭であっても、内部には愛情の冷却や心理的な葛藤のひそんでいる場合もある。

また、離婚した夫婦は不幸で、継続している夫婦がすべて幸福であるともきめられない。

勿論、離婚した者は不幸であらうが、継続していても、離婚の危機をはらみながら継続し、離婚したくても、種々の事情で離婚できないものもあるかもしれない。

それ故、解答者の回答だけで本当の幸、不幸をきめることは困難であるし、はたから観察したとしても、なかなか正確な判断はできない。

こんにち、心理学では感情生活や態度や性格などについてテストの方法で調査、測定して、ある程度の信頼できる結果を得ている。一般にテストの場合には、その感情や態度がよく現われていると思われるいろいろの場面や行動や生活の表現を集めて、多方面から全体的に評価する。そしてその一々の項目がはたして妥当であるか、信頼できるかを統計的に検証して、その結論を導くのである。

結婚生活の幸福度を測定する場合も、このような方法で、ある程度測定できるものと考えられる。

この幸福度を測定する尺度については、さきに米国のターマン氏が作製して、カルフォルニア地方の七九二組の夫婦について調査した結果がある。

さらに、その方法を使用して我が国で昭和二八年に牛島義友氏が、東京都民を主として、全国にまたがり、学歴は中等以上の比較的階級の人達を対象として調査したものがあつた。

本調査は、この尺度に多少の修正を加えて、牛島氏の調査より十年後で、金沢市の状況を知るために行つた。そして前二者の研究の結果と比較してみようと、意図したのである。

次に調査の方法について述べてみよう。

(二) 調査問題と方法

(イ) 調査問題は次の[1]—[8]の問題である。

結婚幸福度に関する質問
 金沢大学社会教育研究室
 社会心理学研究会

おねがい

わたしたちのささやかな研究に御協力をお願いします。この調査は無記名ですし、あなたのお答はだれにもおみせしませんから、次の質問にありのまま、お答え下さいませようおねがいます。

なおお二人で相談なさらず、あなたお一人でおかき下さい。

無記名 年 令 (満 才 月) 男 女
 結婚年数 (満 年 月) 職業 () 子供の数 (人)
 姑の有無 (有無)
 「1」 あなたの家庭では現在の項目について相手との一致、不一致はどの程度ですか。また不一致の場合の妥協の具合はどうですか。下の表のあてはまるところへ○印を入れて下さい。」

事 項	一 致	不 一 致	家 計 の 取 扱 い	子 供 の し つ け や 教 育	作 法	リ ク リ エ ー シ ン	宗 教 に つ い て	交 際	事 務 習 慣 や 年 中 行	感 情 の あ ら わ	し 方 趣 味	方 の 事 の 考 え	義 理 の 親 家	族 へ の 態 度	性 生 活	そ の 他
つねに一致する																
ほとんど一致																
時に不一致																
しばしば不一致																
ほとんど不一致																
不 一 致 の 場 合	自分 が 折 れ る															
	相 手 が 折 れ る															
	双 方 妥 協 す る															
	い つ の ま に か る 妥 協 し て い る															
	い つ ま だ も 妥 協 し て い な い															

〔2〕「結婚を後悔することがありますか。」	しばしば ときに ごくたまに なし	()
〔3〕「もう一度生まれるとしたら。」	同じ人と結婚する 別の人と結婚する 結婚しない	()
〔4〕「真剣に離婚を考えたことがありますか。」	はい いいえ	()
〔5〕「いろいろな点を考えてあなたの結婚生活は幸福ですか。」	非常に幸福 割合に幸福 普通 割合に不幸 非常に不幸	()
〔6〕「結婚が不幸と思われたのはいつ頃からでしたか。」	結婚後(年)	()
〔7〕「一緒に映画、散歩、訪問に出かけることがありますか。」	たびたびある めったにない 全くない	()
〔8〕「あなたの家庭では相手が(次の表)のなかのどのことがらで不平が起りますか。不平のおこることがらに○をつけて下さい。」	収入の管理が下手 収入が若すぎる	()
収入不足	収入の管理が下手	結婚のおかげで自由がなくなった
相手が年をとり過ぎている	相手が若すぎる	義理の親に対する態度が困る
教育程度がちがう	信 仰	食事の好み
習慣が相手と不一致	相手ははりくつぱい	相手は考え方がせま
相手は私を信頼しない	相手は不平が多い	相手はなまけものだ
相手は短気だ	相手は私を批評する	相手は信用できない
相手はうぬぼれが強い	他人に左右される	わがままで

煙草をすう	妻は食事の準備がお	料理がへただ
他の男女に気がある	そく家事がへただ	口きたなくのしる
私の仕事に興味をもたない	酒をのむ	子供をほったらかし
社交に興味がありすぎる	神経質だ	にしている
私が子供をしつける時にさまたげる	せいたくで困る	すぐ感情をそこなう
相手はうそつきだ	困ったくせがある	かけごとが好きであ
私の楽しみのじゃまをする	私の性質やくせを無理になおさせようと	着物のことに興味がありすぎる
身なりがだらしない	知らないおしゃべり	私にこごとをいす
相手の実家の干渉が多すぎる	が多い	家をきれいにしない
	不健康でこまる	仕事をじゃまをする
	相手は嫉妬深い	相手に趣味がない

(ロ) 方法

前記の調査問題について、被調査者に解答を求め、各項目の解答に対して、一定の規準に従って配点し、その点数の総和で、結婚の幸福の程度、すなわち、幸福度を測定するのである。得点の最高点は八七点で、最低は零点になるように配点してある。

(三) 検査の結果と考察

(1) この調査問題は、ターマン氏のを多少修正したのであるが、点数の合計は最高は八七点で、最低は零点になるように配点したことは同一である。この方法で幸福度を算出してみると、次頁の表の如く、夫の平均は五六・七二点、妻の平均は五七・四六点となり、牛島氏の場合は夫の平均点は六九・五六点、妻の平均は六五・

(牛島氏の調査)

幸福点	夫	妻
83 — 87	40	39
78 — 82	85	65
73 — 77	65	65
68 — 72	59	57
63 — 67	44	44
58 — 62	39	34
53 — 57	22	30
48 — 52	12	17
43 — 47	3	15
38 — 42	7	6
33 — 37	4	12
28 — 32	6	14
23 — 27	1	4
18 — 22	0	4
13 — 17	1	5
人数	388	411
平均	69.56	65.18
標準偏差	12.60	16.40

(ターマン氏の調査)

幸福点	夫	妻
85 — 87	72	101
80 — 84	138	172
75 — 79	161	143
70 — 74	116	96
65 — 69	68	66
60 — 64	50	40
55 — 59	39	32
50 — 54	41	33
45 — 49	23	15
40 — 44	14	17
35 — 39	16	17
30 — 34	13	13
25 — 29	10	10
20 — 24	10	5
15 — 19	10	12
10 — 14	7	7
5 — 9	3	10
0 — 4	1	3
人数	792	792
平均	68.40	69.25
標準偏差	17.35	18.75

(本調査)

幸福点	夫	妻
83 — 87	2	
78 — 82	17	22
73 — 77	31	52
68 — 72	41	42
63 — 67	54	38
58 — 62	69	61
53 — 57	61	62
48 — 52	33	39
43 — 47	28	24
38 — 42	18	13
33 — 37	21	17
28 — 32	12	11
23 — 27	11	5
18 — 22	1	9
13 — 17	3	4
8 — 12	1	1
人数	403	400
平均	56.72	57.46
標準偏差	14.24	14.96

一八点であり、ターマン氏の場合は夫は六八・四〇点で、妻は六九・二五点である。
これ等を比較すると当調査の結果は、夫も妻も両者の結果よりも低くなっている。

このように平均は低い原因はいろいろ考えられるが、石川県民性の控え目のあらわれであろう。

なお、この幸福点の分布は前表で明かなように、ターマン氏、牛島氏のものとは両者とも高得点の方が多くなって、一方に歪曲した分布となっている。その歪曲の理由については、牛島氏は解答者が比較的幸福な生活をしている人々から多く選ばれている点や、かかる評定法に共通にあらわれる心理として、とかく好ましい方に偏して反応する傾向のためであろうと述べているが、われわれの研究では、そのような片寄った傾向は前者に比較して顕著ではなく、やや

正常分配曲線に近い傾向を示している。

(2) 結婚経過年数による幸福点の変化

この幸福点は結婚当初と、それからの経過年数によってどのよう
に変化するであろうか。

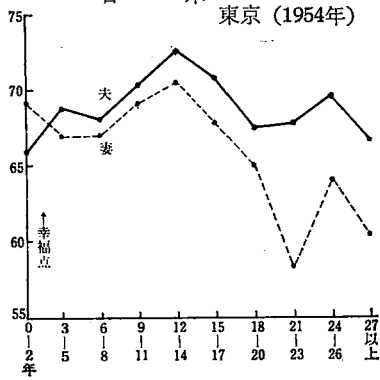
その傾向を表示及び図示すれば、次のようである。

結婚年数別平均点一覧表
男 女

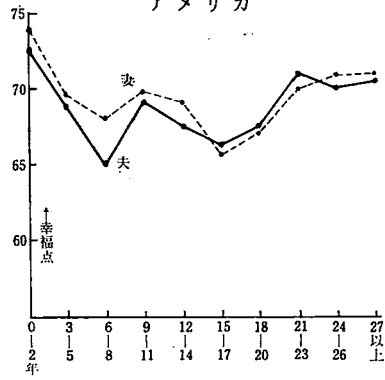
結婚年数	平均	結婚年数	平均
0 - 2年	57.7	0 - 2年	61.2
3 - 5	53.7	3 - 5	57.6
6 - 8	54.4	6 - 8	60.5
9 - 11	52.8	9 - 11	55.6
12 - 14	58.2	12 - 14	56.1
15 - 17	59.9	15 - 17	58.8
18 - 20	54.8	18 - 20	52.3
21 - 23	63.4	21 - 23	55.2
24 - 26	57.0	24 - 26	55.4
27 - 30	60.1	27 - 30	56.5
31以上	59.7	31以上	52.7
平均	65.72	平均	57.46

すなわち、夫の場合は結婚当初は高く、三年、四年と漸次低くなり、九年し一年は最低で、それ以後は次第に高くなり、一八年し二〇年は低くなり、以後次第にもち直している。すなわち、夫の場

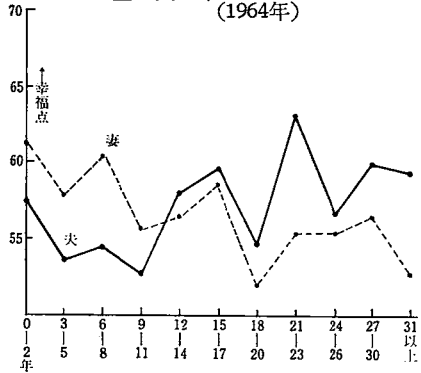
日本 東京 (1954年)



アメリカ



金 沢 市 (1964年)



合は結婚後九年～一一年頃までは不安定で、一二年～一四年頃になると安定してくる、しかし一八年～二〇年に一つの危機があるともいえよう。

妻の場合は、結婚当初は幸福感が高くそれが数年間続き、九年～一一年頃には夫の場合と同様に低くなり、一八年～二〇年頃には極度の危機の時期を迎えるのである。

それ以後の幸福度は夫よりも低くなっている。

この曲線の型を牛島氏のそれと比較してみれば、差異点は結婚当初から一〇年頃までは妻は夫よりも幸福度の高い点である。最近一〇年間に結婚した者は、妻の幸福が高くなっていることは、妻の家庭における地位が高く、妻の座が確立し、妻の安定感が増したことを考えられる。

しかし、結婚後一年以上のものは、何れの年代においても妻の幸福度は夫に比較して低くなっている、この傾向は牛島氏の結果と同一である。牛島氏はこの点について次の如く述べている。

「全体的に、日本においては、夫と妻の幸福点の水準が異り、妻の方が不幸であるに對して、アメリカにおいてはむしろ妻の方が水準が少し高くなっていることから考えられることは、日本の家庭は妻の犠牲の上に成り立っているという感を深める。この点、大いに反省すべきであろう。」と、

しかし、本調査によればこの傾向は次第に是正されつつあるのではなからうかと推察される。

(3) 夫婦間の意見の一致、不一致の問題

日常生活に夫婦の意見が、どんな点に對立し、どんな点に一致点を多く示すかについてながめてみよう。

この点に関する調査項目は、一三項目ある。それらの項目の中で、不一致の程度の高い項目から順に示せば、

- (1) 「趣味」
 - (2) 「ものの考え方」
 - (3) 「感情のあらわし方」
 - (4) 「子供のしつけや教育」
 - (5) 「性生活」
 - (6) 「リクリエーション」
 - (7) 「作法」
 - (8) 「義理の親、家族への態度」
- などである。その反對に、意見の一致度の高いものから順にあげる
- (1) 「宗教について」

- (2) 「習慣や年中行事」
 (3) 「家計の取扱い」
 (4) 「交際」
 (5) 「義理の親、家族への態度」
 (6) 「性生活」
 (7) 「リクリエーション」
 (8) 「作法」
- などとなっている。
- これを比較すると、前の四項目は一致、不一致は正反対であり、後の四項目は順位は代っているが、一致、不一致はほぼ同じようである。不一致の場合、どのように妥協するかをみれば、相手が折れると夫がみとめ、妻の方も私がいづも折れると考えられている項目は「ものの考え方」、「感情のあらわし方」、「リクリエーション」、「性生活」の順序になっている。
- いつの間にか双方妥協する項目についてみれば「感情のあらわし方」、「趣味」、「ものの考え方」、「子供のしつけ、教育」などとなっている。
- (4) 夫婦間で相手に対する不平は何か。
 夫が妻に対する不平の順位は次のようである。
- (1) 「収入不足」
 (2) 「妻の考え方がせまい」
 (3) 「すぐ感情をそここのう」
 (4) 「相手は短気だ」
 (5) 「習慣の不一致」
 (6) 「わがまま」
 (7) 「収入の管理が下手」

- (8) 「結婚のために自由はなくなった」
 (9) 「妻はこごとをいすぎる」
 (10) 「相手は自分を批評する」
- などであり、妻が夫に対してどんな不平があるかといえば、次の如くである。
- (1) 「夫は短気だ」
 (2) 「神経質だ」
 (3) 「食事のこのみ」
 (4) 「夫の収入不足」
 (5) 「わがまま」
 (6) 「酒のみだ」
 (7) 「習慣が不一致」
 (8) 「私が子供をしつける時にさまたげる」
 (9) 「すぐ感情をそここのう」
 (10) 「夫は理屈っぽい」
- 以上である。
- 夫の不平の中で第一位は妻の「収入不足」となっているが、質問の意味を誤解した者があつたのではないかと思う。それは夫婦共稼ぎで、妻の収入不足で不平を起すよりも、夫自身の収入不足から不平が起ることに○印を附したのではなからうかと考えられる。
- もしそうでなくて、共稼ぎ家庭で、夫が妻の収入不足で、妻に不平をいう夫がどのように多いとしたら問題であろう。
- 次に夫の不平の中で、「妻は夫にこごとをいすぎる」、「自分を批評する」という項目は第九位と第十位をしめている。これは家庭にあつては、妻から文句やこごとをいわれたくないという夫のわがままのあらわれとも考えられる。

妻の不平の中で、「夫は短気だ」、「神経質だ」、「すぐ感情をそこのう」という項目は第一位、第二位、第九位になっているが、男性の神経質は妻にとつてはやり切れないものである。

世の中に神経質な夫をもつて悩んでいる妻が比較的に多いことがうかがえる。夫婦のどちらかが神経質ならば、妻が多少神経質でもよいが、夫の神経質は円満な家庭を維持できないと説く人がある。夫達は神経質になつて、妻を困惑させないように注意しなければならぬのではなからうか。

概してこの調査結果から、夫婦間の不平、不満は相互の感情面に關するものが多くあらわれていることから、互に相手の立場、相互の心理的理解を深めて、不平、不満の解消に努力する必要がある。又一面、不平の上位一〇項目の中、順序は異なるが、五項目は夫婦同一である。この点で、夫婦は「お互い様だ」という結論が得られるようである。

(5) 夫婦の幸福点の相関

当調査では夫婦三〇組だけについて、幸福度の一致、不一致の状態をしらべてその相関度をみた。その結果、大体において夫の幸福点の高いものは妻もまた高くなっており、夫の低いものは妻もまた低くなっている。

三〇組の中で五組の夫婦は夫が妻より二〇点はかり低く、この場合、妻は自分の結婚生活に充分満足しているにかかわらず夫は非常に不満をもっているわけである。また、この反対に夫が充分満足して幸福感が高いのかかわらず妻は不満をもっているのが一組あらわれている。

一九五四年の牛島氏の調査では、夫が八五点とか八〇点という非常に幸福点が高いにかかわらず妻は一五点台のものが二人あらわれ

夫 の 不 平

項 目	夫 (403名)	
	不平数	%
収入不足	132	32.8
相手は考え方がせまい	72	17.9
すぐ感情をそこのう	61	15.1
相手は短気だ	53	13.2
習慣が相手と不一致	51	12.7
わがままだ	49	12.2
収入の管理が下手	45	11.2
結婚のおかげで自由がなくなった	44	10.9
私にこごとをいいすぎる	37	9.2
相手は私を批評する	36	8.9

妻 の 不 平

項 目	妻 (400名)	
	不平数	%
相手は短気だ	85	21.3
神経質だ	62	15.5
食事の好み	59	14.8
収入不足	58	14.5
わがままだ	57	14.3
酒をのむ	51	12.8
習慣が相手と不一致	46	11.5
私の子供をしつづけるとき さまたげる	41	10.3
すぐ感情をそこのう	40	10.0
相手はりくつばい	36	9.0

ており、反対に妻が幸福感が高いにかかわらず夫が非常に低いような場合はあらわれていないと報告されている。また、米国のターマン氏の夫婦の幸福度の相関は〇・五九であり、牛島氏のもの〇・五八となったと記録されている。この場合、何れも調査対象の人数は明確でない。

当調査の場合、相関は両氏の調査よりも低く〇・三七である。

この結果も信頼度の検定では、一応信頼性があることになっていいる。当調査は僅か三〇組の相関のため、極端な数組の差異のために影響されたと考えられるが、地域的に考えてみれば、夫婦の幸福の程度は決して同じでなく、それぞれ独自に自分たちの結婚生活の幸福度を判断しているものが金沢市には多くあると考えられる。

(6) 職種別幸福度の

平均

八〇〇名の職種別に幸福度の平均は次の表の如くである。

この表に明かなように、各種の職業の夫婦の幸福度の平均は、ほぼ同じような結果になっている。

なお、この職種の項目の中で、「その他」の中には商工業関係者、医師、

夫 妻 一 覧 表

職 名	人数	平均	職 名	人数	平均
公務員	110	56.5	公務員	69	57.1
会社員	89	54.2	会社員	31	54.1
教員	79	53.1	教員	49	53.1
			主婦	185	57.1
			その他	62	60.9

理髪師、記者等の関係者が含まれている。

(四) 結 語

(1) この調査に依って金沢市を中心にした周辺の比較的知的階層の結婚の幸福度が明かになった。先の研究である米国のターマン氏、東京都中心の牛島氏のものと比較してみると幸福度は夫婦共に低いことである。

これは、北陸の地域的条件は前者に比較してよくないこと、更に、石川県民性の控え目の表現によるものと思われる。

(2) 結婚初めから一〇年頃までは、妻は夫よりも幸福点の高いことは、牛島氏の結果とは異って、米国のターマン氏のものに類似していることである。これは戦後に結婚した婦人は、一般に妻の座が確立し、妻の幸福度が高くなった証拠でよい傾向と思われる。

(3) 米国においては各年令段階には、夫婦の幸福度は大差がなくほぼ平行しているのに対し、日本の場合は、総じて妻の幸福度は低くなっている点は、牛島氏の指摘の通り、日本の家庭は妻の犠牲において成立していると考えられるので、この点は今後は正されるべき事であろう。

(4) 結婚後の経過年数による幸福度の変化については、結婚の破綻の危機は夫の場合は九―一一年に第一回、一八―二〇年に第二回目がかかること、妻の場合、最も顕著な危機は一八―二〇年頃であることが判明した。

これらの危機の原因は心理的倦怠や経済的条件や肉体的条件等が考えられるが、その分析研究は今後の研究課題にしたいと思う。(5) 夫婦間の意見の対立について、何が問題かが明かになった。

それについて、主なる問題点は、経済的問題と夫婦の感情的問題である。幸福で円満な家庭生活には、経済的安定性と情緒の安定性が必要不可欠の条件である。

この点から、夫婦相互はどんな点に注意したらよいかの参考資料になるものと思う。

(6) この調査対象は比較的知的階級の者であったため、社会全体の傾向とは、結論できないと考えられるが、一応の傾向が判明したと思う。

今後、農山漁村、労務者等について調査してみたいと思う。

(7) 以上の外、当調査によって種々の事柄が明かになっているが今後の機会に発表したいと思う。例えば、子供の数、姑の有無、等幸福度を左右すると思われる他の要因については省略した。

(8) 最後に、この拙い研究に対して諸賢の御批評をお願いする。

調査協力者

萬	古	北	越	下	加	角	森	新	島	津
			谷							
	屋	野	田	内	藤	井	沢	濃	田	田
				外	富	悦	外	利	一	外
睦	知	節		喜	美		朗	男	盛	夫
以	栄	子	子	子	子	子	子	子	子	子
上	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子